宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 代表 26番
定価一年送料共 500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市吉塚一丁目三五番三号（〒八一二）電話 福岡（九二）六五一九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（三四）三三一二三四（代）・六〇〇番

宗像にコウノトリ

―続いてハクチョウも―

神郡宗像は環境保全のモデル

宗像郡玄海町吉田地区に去る十一月十四日から一羽のコウノトリが飛来し地元民は勿論、誤認を色めきたたせた。

町の愛鳥家がコウノトリではないかとカメラに収め、専門家の鑑定の結果、間違いなくコウノトリと解った。

コウノトリは全体が白っぽく背丈は約一メートル位で羽の幅は二メートルにも及ぶ。

又玄海町田野の養鶏業花田信勝さん（四九）が放魚しているコイの池にハクチョウが飛来。たちまち町の話題となった。

このハクチョウは、体長七十チセ位の大型で色調がクチバシから頭孔部にかけ黒から紫色になって体は純白、養鶏場の人々は「夕方になると飛立って神湊方面へ帰っていくようだ。人が来ても驚かず、スイスイ泳いで魚をたべている。ハクチョウが来たのは初めてでどこから来たのだろうか」と語っていた。

宗像は自然に恵まれ、且つ環境保全に全力を注いでいる折、このように保護鳥が飛来してくるのは大変喜ばしいことであり、これを機により多くの珍客が来れるよう環境保全に努めていかねばならない。

写真は毎日新聞社提供。

細長い奇麗な体の緑と伸び伸びと開いた大きな羽根の調和が優雅である。

表彰式行わる

―宗像大社菊花展―

西日本最大の菊花展としてうたわれた宗像大社菊花展は予定通り十一月一日から二十日まで開催された。特に今年から大社では昨秋斎行された遷宮祭を記念するとともに、精神的復興をめざして記念大祭が執り行われることとなり、種々の神賑行事とともに有意義な催物となった。境内一面に陳列された見事な菊は参拝者に喜びと感銘を与えていた。

尚、大祭日（十二日）に表彰式が行われた。

成績は次の通り（敬称略）

総理大臣賞　門司区　佐野　功
農林大臣賞　小倉区　溝部　元義
文部大臣賞　嘉穂郡　川崎　正木
知事賞　八幡区　塩川　辰雄
議会議長賞　若松区　川野　盛
大社賞　門司区　駒山　直次
同　行橋市　新川　一夫
同　粕屋郡　青谷真五郎
同　八幡区　広渡　健寿
菊花会賞　伊藤　富夫
同　八幡区　加藤　忠雄
同　八幡区　山崎　正親
同　門司区　井関　二男
県花き園芸組合長賞　戸畑区　俣野　辰雄
同　粕屋郡　中野　真
同　八幡区　大崎　二三
同　八幡区　伊藤　常光
町村長会長賞　門司区　池上　福元
同　小倉区　立花千代治
同　八幡区　柏木幹次郎
同　八幡区　波多野松男
玄海町長賞　若松区　谷崎　勇
同　八幡区　前野ますえ
同　若松区　堀之内稲男
同　戸畑区　志和　一友

優秀賞
同　八幡区　古波蔵正忠
同　若松区　島村　一
同　〃　岩崎　貞男
同　小倉区　石本　正義
同　〃　坂井　章来
同　〃　竹内　豊
同　鞍手郡　丹生　兼彦
同　宗像郡　吉崎　三吉
同　〃　小沢　新助
同　〃　惣浜　竜一
同　〃　高田　太助
同　〃　矢野　登
同　宗像郡　矢野　定
同　粕屋郡　安永　秀喜
同　飯塚市　吉田　巌夫
同　門司区　原田　到留
同　小倉区　伊達　学
同　若松区　藤本　茂
同　〃　杉山喜三郎
同　八幡区　平野　直義
同　若松区　小沢マサエ
同　宗像郡　辻野　好房
同　飯塚市　田忠　常雄
同　若松区　南川　朝雪
同　鞍手郡　春田　泉
同　宗像郡　石井　延吾
同　飯塚市　田代　定

金賞
同　若松区　八幡区
同　門司区　井関　二男
同　粕屋郡　中野　真
同　八幡区　大崎　二三
同　若松区　伊藤　常光
同　門司区　池上　福元
同　小倉区　立花千代治
同　若松区　柏木幹次郎
同　飯塚市　波多野松男
同　宗像郡　谷崎　勇
同　飯塚市　前野ますえ
同　戸畑区　堀之内稲男

銀賞
同　若松区　八幡区
同　門司区　井関　二男
同　粕屋郡　中野　真
同　八幡区　大崎　二三
同　若松区　伊藤　常光
同　門司区　池上　福元
同　小倉区　立花千代治
同　若松区　柏木幹次郎
同　飯塚市　波多野松男
同　宗像郡　谷崎　勇
同　飯塚市　前野ますえ
同　戸畑区　堀之内稲男

以下佳作受賞者名は省略させていただきます。

論説　改造家旧事記

―讃岐の非常人(二)

天性の資質は幼時から非凡であった。独創力に富み種々の技巧に工夫を凝らし、その着想機敏さに非常人の名に値する朋輩を驚嘆して虫人を驚かした。二十二才の時、父の跡を継いで藩のお庫番になったが、この鞘後に安住する器ではない。藩中の雛は二十七才退役を決意し、三十才の頃江戸に出て湯島聖堂に学んだ。官医なる田村元雄について医学はもとより、製薬はじめ物産の開発にも目を向けたのである。

海外から僅かな窓口より伝わってくる新知識を渇望して長崎に赴き、蘭語を修めて物産本草の学域にも志している。漸く彼の名声は高くなった。当時の高松藩主松平頼恭（よりたか）は、源内が他藩に召し抱えられそうになったので、呼び戻して高録の士分に取り立てたが、長くは居つかなかった。時に享保九年、三年の後同十一年には再び浪人となって江戸に出て、史上あまり好評されないが当時異例の出世を遂げた老中田沼意次に見出されて活躍したのである。後には鉱山の開発にも志し、秋田に赴いて実情を調査するなど、多岐に亘る研究発明が彼の名を一層高からしめた。

同じ足軽出身の意次も、凡庸の人物ではなく、よく人材を登用したが、中でも朋輩と言えるのは平賀源内・杉田玄白などの変り種の起用であろう。源内の多才を愛し大いにその主張や技術開発を後援した。田沼時代として施政の紊乱を酷評する史学者もあるが、当時の進歩的学者は意次を得たように意次の理解とその後援を喜んだのである。

当時としてはまことに珍しい機械エレキテルを発明した源内は、一面文学的情緒的天分をも持ち合せ、浄瑠璃本「神霊矢口の渡」を作っている。彼より稍々時代の早かった松門左衛門の数々の名作にも刺戟をうけたに違いない。

現代の学問の分派組織とは異る学術、語学医学物理天文農学と多岐に亘って、浅はあっても万般の学域を渉猟した学者と言えよう。それが弾圧的で新しい学識を嫌う風の強かった封建時代に、人材主義進歩主義の田沼時代と渇に限り才能発揮の意欲に燃える名もなき新人を喜ばし、田沼にその才能を伸ばす機会を与えたであろう。

安永八年（一七七九）発狂して、殺人罪の故をもって抽籤され、牢内で急病死したと伝えられる。その年五十一才。遺骸は杉田玄白の手によって浅草の総泉寺に葬られた。

藩侯等の不満を買い幕府の官憲も内心喜ばぬ者多く、天明四年（一七八四）その子意知の殿中に於ける不仕末がきっかけとなって失脚するに至ったのである。然し、源内の入獄の咀は意次も実権を保っていたので、救出し得る情況も設定出来るが、どうしたわけで助けなかったか不詳である。先輩談によれば、牢死は偽装で、ひそかに遠州に身を隠し、八十余才まで生存したと言う。それを事実と見るなら、老中の権勢をもって意次が処理したとも考えられぬことはない。

居宅の碑地には立派な銅像があり、仰げば奇傑源内の生前の俤が偲ばれる。昭和九年の建立。邸内は建物の身分だけに広くはなく、低い二階をもつ質素な建物である。著作「火浣布考」「神農本草経図」「食物本草」等が残っている。浄瑠璃本や戯作数種は、江戸の趣興の影響によって浅草の総泉寺に葬られた。

当時彼等の非封建的知識人を偏愛した意次は、

そうして、晩年にかく暗らしに物したものであろう。足軽に止まらなかった青雲の志、才能ある若者が故郷を出るなと愛りはない。

源内をして現代の世に青春の夢を持たしたとしたら、まず富貴栄達を求めない自信を固辞する厄介な人物になったかも知れない。辛辣な批評家に成長したかも知れない。或は旧態打破を叫ぶ思想家として寄与するか、その思想の実践者となっていたかも知れない。

ここで考えられることは、身分の低い家庭に優れた資質を持った人物が育った場合である。まず貧しい父母の苦労が目につき、くだらぬ同輩が門地や財産のおかげで優位にある矛盾を感するであろう。その才能を伸ばし人間的な磨きがかけられると、羊頭狗肉の偽瞞に反逆することになる。正しい姿勢に改造したい情熱が沸き立ってくる。

それらの埋もれた理想家の改造意欲が、幕末を呼び多数の下級武士による維新への奔流となったと考察される。

阿蒙少言

どんな立派な贈りものでも表記は粗品、多額な見舞金既別でも寸志、わが国の儀礼はこれを常識とする。拙者・豚児・愚妻などの謙遜は欧米にはない。謙譲を美徳としてきた東洋の道義観は、明治以後権利思想を根底とする西洋の選挙制度の模倣によって、少くとも政治の分野で崩れた。党略排他、自己推薦の選挙は中味が実にお粗末でも逸品と表記するに同じ。同床異夢内派閥も、利害による離合で、佐藤前首相が後任総裁選に「君子の争い」と舌風で品のよい発言をしたことがあるが、粉飾も度が過ぎると苦笑を誘うだけ。利権の亡者達の舞台裏は泥沼の暗闘だと、評論家は酷評している。大体君子の居ない処に君子の争いなどあろう筈がないと。学生が「キミコの争い」とほどんな喧嘩かと云ったが、政治家の嘘よりもキミコの方が面白い。国民の多くが不信感を抱き、特に青年層はまじめな批判を越えて軽薄皮肉の弁を聞かせる。仕方がない。公正選挙は有権者の商売用語でもないのに、遊びなしの記録は作られず、摘発された数も氷山の一角となれば、金品授受の策謀は絶対に絶えないことになる。公正選挙に忠実な人物は稀だろうが、あったらの蔭の声。万機公論に決する政治の最良の方法と示された明治御年以来、漸次自由民権の思想が育成され、戦後の変革が今日の姿をもたらしているので、投票によって多数決以上の歩み方はないと信じたい。多数決必ずしも最上とは限らない、民主主義は最上の理念とする。ある職場の壁に自戒訓が掲げてあった。その二条に自分の主張に反対するなら、主張に誤りがあると考えよと。

（白水）

第三回　宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

車窓より見る宗像の山々に枯れ松の赤しもみじばのごと　田久　立花　勇雄

昼食のあとを来て寄る藤椅子にけふはひんやりと秋がしのびる　福岡　桜井　ツ子

佳作に決定すとう詠進歌明治神宮通知に心おどりす　田久　小方　実

火災受け三歳振りに曙ぶ飯櫃の吉野の杉の木目素直なり　勝浦　永島　文子

定年も近い齢と急はるる社宅の庭に菊つくる人　名残　竹原　圓

退院の人捨てし菊瓶にさし枕元に置く身よりなき老人　吉武　白木うめの

嶽死体を検べる吾の背後よりガードに女の鳴咽こだます　戸畑　田中　桂一

野菊咲く鎌栄の山野同行二人等のしあわせ祈りて廻る　原町　八波　五月

雨の日も風にも耐て少年の口笛吹きつ新聞配りゆく　福岡　麻生　初栄

乳児抱き出勤する若き母は満員電車に汗ふきており　池田　安部　一己

みつ湖のあなたにきすこつついきて釣師の影もふかくさしむ　福岡　吉田　信夫

三本の樺の稲紅葉せる空の明るし山の一角　津屋崎　麦野　時雄

たそがれの富士の姿は黒々と墨絵の如く雲海に立つ　津屋崎　占部　由久

病みて見る夢は若かき日すこやかに働きし頃の事のみにて　戸畑　田中　ハツセ

夫と草抜く休日の昼下り百舌鳥鳴きて詩断たれぬ　福岡　吉田　信夫

退院の人捨てし菊瓶にさし枕元に置く身よりなき老人　戸畑　田中　桂一

温かきものを飲まむと佗しかる紅茶とり出す朝の冷えゆき　光岡　河村　久光

秋時雨と言い来し大根の種を播く山の畑に月影淡し　東郷　藤崎　辰子

気ごたりし菊の支柱を立て終り温りもつ庭掃きてすがしき　武丸　立石ろせ乃

この地より出でし后の一族の古墳と聞きて洞に入りゆく　田島　吉武　武雄

門に出て独り見てをり未の子が姿りて住める山のふもとを　武丸　原田　リノ

笑顔せし君の姿の視えぬ遠長迫るにしばしたたずむ　津屋崎　菱花　女

自動車の往来繁き橋の上釣る人の多き日曜　徳重　石松やす子

稲刈の雨に終りし休日は何時もより早く夕住座する　久留米　篠田太郎坊

元日と思えば向き変ゆる鳩群の羽音にも厳しきもの潜みおり　吉留　伊豆　仁江

梁柱太しき立てし大祖の御心偲ばゆ改築しゆくに　武丸　原田まつ代

葉の落ちし柿の高枝に小鳥なきびしき声に又一羽来ぬ　宮田　北原　君子

蓮根を道辺に立ちて売る女の青黒き土の手に泌みて見ゆ　田熊　鷲津かつ代

口笛を吹きつつ積荷をまじめなる若者はたかきトラックの上　岡垣　吉晋　山人

菊花展社頭に百舌の声たかし神苑に香り一パイ菊花展　宮田　片山　一

眼交の山容一目まくるし紫の動きに陽をしかわれば　武丸　原田　リノ

菊花展盛大に催さる

―境内は花園と化す―

「ワーッ、きれいだわあ」「菊がこんなに美事な盆栽になるなんて」「芸術品ね」などなど、感嘆と賛讃の言葉がとびかう。

当社の境内にはいったとたんに菊の香りがそこはかと漂い、歩を進めるうちに心字池と神門の間の広い境内をフルに使って陳列された色とりどりの菊に、まず第一声。参拝者からは「ほー」とか「ワー」とかの感嘆の声がもれる。

厳しすぎると云われる程の出品規約を通って出品された菊だけに、第三回の菊花展とは思われぬ程の充実した内容の菊花が、観る人に感銘を与えるのであろう。

特に大輪壇で文部大臣賞に選ばれた鞍手郡の川崎正木さんの作品はみごとなもので、審査長（県園芸試験場長小原科氏）の言葉をかりると「全国でもこれ程の美事な菊はないでしょう」といわれるほどのもの。

そのほかの作品もけっして劣るわけではなく全般的に技術の向上がみられ、実力が伯仲していたため審査が非常にむつかしかったそうである。

又盆栽作りに至っては全国でも北九州勢は有名をはせているだけあって、人々を十分満足させていた。

この菊花展に使用された陳列ハウスは延べ一〇〇間。要した費用は数百万円。菊は一年間をかけて作ったもの。何と無駄なことをと思われる向きもあるが、主催者側である会員各位の願いは『花を愛する心で豊かな国土を』の只一筋である。

今年からは会の趣旨に賛同して多くの方々から御支援と御協賛をいただき、このことが会の関係者を大いに喜ばせるとともに、大きな励ましになっていた。

作る人と観る人が心を同じくし、この会の趣旨を達成してもらいたいものである。

菊花展会場に掲示された協賛者芳名は次の通りであった。（順不同敬称略）

久田猪一郎、臼杵運送、栗組、弘江組、赤星材木店、来島吉太郎、山本工作所、安部酒販店、出光興産、新出光石油、太田凱夫、伊豆酒也、宗像郡各町村長、井筒、勝屋酒造、地元青年団、以上

献詠　短歌大会開かる

―当社清明殿にて―

去る十一月十二日、午前十時から宗像大社遷宮記念大祭に因んで開催された第一回宗像大社献詠短歌大会は、好天に恵まれ、約一六〇名の出席があり、この種の催しとしては盛況なスタートを切った。

当短歌大会は精神的復興をはかり奢侈されつつある宗像大社遷宮記念大祭の趣意をそうと同時に、文化事業の一端として我が国の精神文化昂揚をめざしてなされたものである。

今日までは、北九州市ブロックと福岡市ブロック、郡部ブロックなどにわかれ、独自の短歌会のみがもたれていたが、此の度の宗像大社での献詠短歌大会を契機として、県内の全短歌同好者が一つになって会を持ち、互いに交流しつつ切磋琢磨し文化昂揚に寄与するものと各方面から期待されている。

当日は汗ばむほどの暖さに恵まれたこともあって、定刻十時にはほとんどの出席予定者が受付を済ませ、順調に開会した。

献詠式は開会前の午前九時から、時間の都合により時前に大会実行委員参列のもとに大社神前で行われていたため、開会にあたっては会場である清明殿から出席者全員が神殿を遥拝した。

大会次第が進むにつれ会場には同じ道を求める者同志の共感がめばえ除々に熱気が充満していった。

それでも、会員紹介や記念撮影の時には和やかにユーモラスな会話が交されて交歓がなされていた。

午後の部の開始前には宗像大社の〝神々はよみがえる〟の映画があり、会員に多大な感銘を与えていた。

午後の部の中心は選者講評であるが、先生方の厳しい指導に一同満足され、引続き表彰式にうつり午後四時過ぎに閉会した。

参会者は次回を約し、「とてもいい大会でした」の言葉をのこされ会場から退出された。

なお成績は次のとおり。

特選（選者選）

西尾神谷実、宗像郡臼木うめの、宗像郡八波五月、福岡市井本八重子

入選（五選）

松岡すまよ、吉田ますみ、白神是空、小方実、松木茂雄、正木可代、中佳すぐる、池野フミ、浅見武天、秋枝杜美子、大隈幸代、藤井ます、小田部滋英、加藤すみ子、手島よし子、藤渡由久子、橋口かおる

――――――――――――――――――――――以上

当紙面をかり、この短歌大会を御支援くださいました方がた始め選者先生方、献詠いただきました皆様方に厚くお礼申し上げます。

特選並びに入選詠草

クレーンに吊る材がひびと時かたむきて
遠く流るる綜を断ちたり　（神谷）

山も吾も夕焼に染み刈り草
下に明日来む鎌をかくすなり　（白木）

縫う間より糸通す間の長さよと
嘆きし母の齢とたりぬ　（八波）

荷も子らも車に積みて移り来ぬ
あわだち草の咲けば思い出づ　（井本）

新婚も銀婚の旅にも行かず過ぎて還暦の夫と叔の種時く　（松岡）

しぼる手に山羊の温くもり伝はりてましらき乳はほとばしり出ず　（吉田）

入け無き宮居に薫る木犀にしばし警蹠の足を停めたり　（白神）

妻なれば盲ひの汝がのべくれし夜具のゆがみを直して寝るも　（小方）

小商ひの他に職のなき齢ひなり冷凍ケース丹念に拭く　（松本）

信号の変りて動く人群に安けさうなきの犬も交れる　（正木）

足なしの吾を抱かむとて二才児のだきつきしままともにころびぬ　（宮倉）

紙漉きてながき一生の身にそ泌む彼岸会ぞるるあかつきの鐘　（平原）

遷宮記念特別展

―宝物館にて行なわる―

昨年十一月十一、十二日の遷宮祭を記念し、本年より十一月十二日を遷宮感謝祭と決定された。

その奉祝行事の一環として当社宝物館に於いて十一月一日から十五日まで神宝展を開催した。出品物は、遷宮祭使用の御神宝を中心とし、崇敬者による奉納品ならびに伊勢神宮撤下神宝である。

これまで、これらの御神宝及び奉納品は、当社内のそれぞれの建物内に格納し、また飾っていたものであるが、一堂に会する機会がなく、このたび特別展を開き、展観に供したものである。

写真は遷御神宝（遷宮祭御幸の威儀物）で、右より宮御さぶ、紫御さしば、御弓、御鉾、白杖、御やなぐい等。

郷土懐古　宗像の農耕儀礼 (11)

―宮座　その九　内殿

日吉神社、元禄十四年春中旬、古内殿の山王神社から当地に移ってきた。十一社といった。十一柱を祀る。戊辰詔書（五ケ条の誓文か）の御発布とともに統一した。枕神に立たれて、猿が沢山集っているのでこを探定した。猿をとることも共ってともならぬ。本座は宗像宮と同じという。宮座の記録は元禄年かゆり民子が保管している古座十八戸ほかに三つある。その日になと寄り合って御飯たべている。中座十七人統一する当時の記録は保管している。百五十年間位明にわかる。新座十六人。百年位前。第一の宮座十五人五六年前に。現在では十月十八月に一緒にやる。

古座が十八日に神社の前である。以前は切米で酒を作っていたらしい。十六日に口あけ祭、神様にあげる。九月二日には座元は〆おろし大祓いする。福間から受取りましたという鷹を下げ十八人合計が塩い取ってくる。十七日座元で床の間でお供えして幣を切って神おろしする。本座は九時から昼まで酒が主男だけである。御馳走もなにあたらせぬ。四時頃後設の座がある。酒飲めぬ人のためにやるらしい。十八日九時頃神社に来て本座をやる三時頃になる。当番の受け渡しをするときは受取った者が正面にすわるわけ。座の真中に鷹を作ってそこで双方受け渡す。三宝に箱をのせて神殿で大杯の酒を渡す方が飲みほして親椀を持って受け取る方の前にいく。それを飲みほして確かに受取りましたという鷹を下げ七日座元で床の間でお供えして幣を切って神おろしする。本座は九時から昼まで酒が主男だけである。御馳走もなにあたらせぬ。四時頃後設の座がある。酒飲めぬ人のためにやるらしい。十八日九時頃神社に来て本座をやる三時頃になる。当番の受け渡しをするときは受取った者が正面にすわるわいが、他の人が座を覚っている。

飲む。座元はまた新しくつけて、瓶底を飲んで下さいと持っていく。それから御飯で解散になる。今は不厳格なものである。中座もまた同様に。新座も同様第一の宮座儀式だけ。

古座十八人が揃わないといけない。座元のことを悪しざまにいう。上座のとき御供えを献げる。祝詞が終ると直に清竹で鳥居をしはって誰も入れない。その間小鳥も啼かぬ。二日も三日もおあがりにならぬともいう（鳥がもべない）。その日におあがりにならぬと民子が分家するかして古い新しい座ができたらしい。神社の最大の行事は宮座だった。本木なぞは食器には宮の字を入れて決して他の事には使わせない。氏子も非常な楽しみにしていた。平等寺では神田は新年の宮座するまで新鶴にても不幸がないという。福間の古島神社では宮座の七たび宮座には後燈組、四名があって、お供えものを作って後燈がわけやる。神職代りで祝詞をあげてすだけである。河東村長導君は後燈の役跡。記録あるやも知れぬ。

（昭和十一年七月神官緒方孝太郎氏、六十四才談）

―古野先生著書より

じとる。それにはいくつ五軒でおみくじと大いに悦ぶ。翌年の宮座するまで新鶴にても不幸がない。

西郷部落にも宮座がある。畦町の鳥の巣部落は鳥の巣神社が氏神だったらしい。宿が発展するようになって本木から人を召したし、本木の八幡宮を勧請した。これだけで七たび座、一年に七度の宮座をやった。旧正月五日、同三月三日、同五月五日、同八月十六日、同十月十六日、同十一月十六日、十二月十六日。十二月十六日には宮座にてお衣換えをする。紙で作って差上げる。これもやめた。この七たび宮座には後燈組、四名があって、お供えものを作って後燈がわけやる。神職代りで祝詞をあげてすだけである。河東村長導君は後燈の役跡。記録あるやも知れぬ。

（昭和十一年七月神官緒方孝太郎氏、六十四才談）

―古野先生著書より

こうのみなと　神湊

楠早鳥作
福田長庵画

前編の序に

福田長庵画伯、宗像編集部の御協力により小説「神湊」も稿を重ねて二十五回を数えるにいたりました。

この小説はここまでを前編として以下五十回までを後編として完結させたいと思っています。そこで今回はこの二年間に寄せられました読者の方のお手紙を掲載させて頂きまた御質問にお答えいたしたいと存じます。

松山出石手にお住いの佐藤豊信氏より

一前略

宗像誌御掲載の小説神湊、毎回興味深く読ませて頂いております。突然では御座いますが二、三知りたい事が御座いましてお尋ねする次第です。一、主人公の九明盧とを要る若者は実在した人物でしょうか。二、また実在せる人物であれば彼の墓地とが関係する遺跡等は現存いたしますか、小生、中世の対外交渉に関心をもっているものですが御教示賜ひば幸甚に存じます。

御質問の神湊の主人公である若者は確に実在した人物であります。これは伊藤常足の書きました太宰管内誌の中に

九明盧公墓

【碑銘】日正平十年二月九日往生極楽日口大明国使従往郎山西行省都事九明盧公墓、此石碑は鎮国寺の境内にあり、

と記されています。作者もこの人物に興味を覚えて研究を始めたのがこの小説を作る動機となりました。しかし調べますとこの人物は全く謎に包まれて他の史書に皆目出現をいたしません。墓もいつの時代にか草に埋もれたのでしょうかその跡も定かではありません。波濤星を越えてこの宗像に使し故国を望みて没したであろうこの人物を思う時、ただ一行の史書の人物に止めるに忍びず、当時の社会状況を通じて再び今日に甦らせたいと念じて作者は努力しております。

また大分県宇佐市の本好正康氏より次のお手紙を頂きました。

「私儀、先般新車を購入いたし貴社ご参詣いたしました折、御社頭で貴社御刊行の宗像を頂戴し神湊を読ませて頂きましたところ頁氷式目に大船廻法と言うものがあると言ことを知りました。これと宗像神社の関係についても少し詳しく知りたいのですが以下略」

と一刻の歓談をされて帰られた。

このような読者の方々のこの一稿によせられる御愛読を想う時、作者は一層の努力と研鑽を積まねばと期する次第であります。

先月、本社に作者を訪れてみえた愛読者のお方は、

「最近、田中内閣により日中国交が回復して以来、日中は一衣帯水の間とか導く近き隣人とか言われますが、こんな感覚は宗像では数百年も前からもっていましたようなもっともこれも小説神湊を読んで知った事ですがね」

氏は「これが成立について暫定的の結論をいえば室町時代始めの頃、上方（摂津、和泉、紀伊、勢）地方に於て廻船業者の間で作られ、同時にそれが幕府の公法である如く奥書きされたものであろう」と述べられています。宗像神社でもこれにより菅屋から新宮まで十数里の海岸の漂着物を悉くその所領にしていましたが、寛喜三年（一二三一）往回弥陀仏の発願による鐘岬港の築港が完成し往来船の難破が激減したため神社財政に及ぼす影響が多く朝廷ではこれにより曲村四十町歩を宗像神社に賜りその修理料とされました。

この曲村四十町歩の御寄進は中世紀の宗像を知る上に非常に重要なことで、つまり往年宗像沿岸に漂着する物が田地四十町歩の収穫物に匹敵するだけのものがあった事を意味し莫大な数の往来船があったと考えられます。これらの交易船を基盤として吾が宗像は中世紀に於ける一大貿易圏を確立していたのです。

× × ×

玄海町

文化祭開催される

―主婦らの出品を主に―

十一月三日（文化の日）宗像郡玄海町役場大議堂に於て「文化祭」が催された。

この文化祭は毎年地元友交婦人クラブ（田島、鐘崎、池野地区）会員数百名の主催により、玄海町の後援によりおこなわれているもので今年は三回目を数える。

また この文化祭の目的は、地元玄海地方の郷土物産をより向上させて、広く人々に見ていただき、地元の発展と共に家庭で不用になった品々を必要な方々に超安値で販売し会員相互の信頼と親和を深めていたためのものである。

会場には、主婦を始め、業者等多数が押しかけ、地元神代焼（下田弘之氏）をはじめ、その道の専門家も姿を見せ、主婦たちの作品に驚きの声と共に指導いそがしかった。

（写真上は会場風景）

飛鳥展開かる

―当社神宝多数出品さる―

去る十月三十八日から十一月十五日まで東京都新宿区の小田急デパートに於て朝日新聞社主催、文化庁後援により「飛鳥展」が開催された。

これは小田急開店十周年記念の特別展として行なわれたものであり、飛鳥時代の宮都、古墳、寺院址などの写真、模造、出土品の展示である。この時代は朝廷が外来文化取り入れのために仏教を重んじ、大和を中心として全国に寺院を建てさせた。

先年来、文化庁及び奈良文化財研究所の手で宮址、寺院址を発掘調査しており、その報告と史跡保存及び史跡に対する理解を深めることを意味している。特に注目されるものは奈良県で発見された高松塚古墳の出土品および模型などである。古墳としては小規模であるが、壁画、出土品は大陸との関係性が非常に強い。

当社は三十数点からなる国宝を出品し、特に会場の一角を「沖ノ島コーナー」として拝観者の注目を浴びた。当社神宝は飛鳥時代との関連性は薄いが、それ以前に於ける我国の大陸交渉史上欠かすことの出来ない事物であり、大和朝廷が最も重要とした地域でもある。

話題の新車をみる (六)

ニュー・マツダ・ルーチェの巻

一九七五年に発効する米国マスキー法をめぐって世界の自動車メーカーはそれに耐える低公害エンジン開発に躍起になっている。

この緊迫の課題に伴い米国と英仏などNATO加盟五ケ国は、十一月十四日、低公害エンジン開発で協力することに合意、調印し、日本とスウェーデンにも参加を求める予定であると外電は報じた。

日本国内に於ても中公審の大気部会の中間報告が十月三日に原案通りに了承され、予想通りマスキー法の焼き直しとして米国並の厳しさになることは免れなくなった。

技術的にかなりきついマスキー法の要求に対して本田・三菱はシブロエンジンの新技術開発によって乗り切ろうとし、東洋工業は低公害・高性能として世界の注目を集めている。

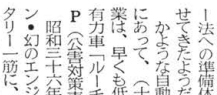
一九七五年に発効する米国マスキー法をめぐって世界の自動車メーカーはそれに耐える低公害エンジン開発に躍起になっている。

この緊迫の課題に伴い米国と英仏などNATO加盟五ケ国は、十一月十四日、低公害エンジン開発で協力することに合意、調印し、日本とスウェーデンにも参加を求める予定であると外電は報じた。

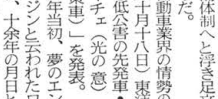
日本国内に於ても中公審の大気部会の中間報告が十月三日に原案通りに了承され、予想通りマスキー法の焼き直しとして米国並の厳しさになることは免れなくなった。

技術的にかなりきついマスキー法の要求に対して本田・三菱はシブロエンジンの新技術開発によって乗り切ろうとし、東洋工業は低公害・高性能として世界の注目を集めている。

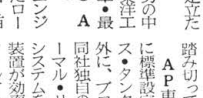
MCAシステと呼ばれるものによって、本田技研はCVCC（複合渦流調燃焼）方式によって、また東洋工業はREを採用することによって七十五年のマスキー法に十分対処できるという比較的冷静な見通しを立てている。

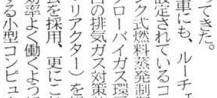


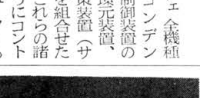
EGR（排気ガス再循環装置）やリアクター等の後処理機構を有するMCAシステと呼ばれるものによって、本田技研はCVCC（複合渦流調燃焼）方式によって、また東洋工業はREを採用することによって七十五年のマスキー法に十分対処できるという比較的冷静な見通しを立てている。



すなわち、三菱は新型エンジンEGR（排気ガス再循環装置）やリアクター等の後処理機構を有するMCAシステと呼ばれるものによって、本田技研はCVCC（複合渦流調燃焼）方式によって、また東洋工業はREを採用することによって七十五年のマスキー法に十分対処できるという比較的冷静な見通しを立てている。







宗像大社歌会

俳句作品集（二九）

放生会寸がすが神の里　鞍手　来島　艸雨

銀の笛遠もせに落つ彼岸寺　津屋崎　菱花　女

築地とは宅工業地帯秋の雨　吉留　伊豆　湧泉

山霜頭残してはるけく稲ありぬ　東京　小浦　濠介

農婦それぞれあきの遅れし雨かこつ　東郷　有吉　春子

虫の声一人の夜に字を習う　武丸　野中　和子

煮　久留米　篠田太郎坊

お椀よりこぼれんばかりの霜前雑　東京　小浦　太平

爽やかに頭水引きて御苑だり　福岡　入江　柳江

来て見れば霧たちこめるナスビ畑　福岡　麻生　初栄

宗像神社沖津宮祭祀遺跡

昭和四十四年度調査報告

沖ノ島

さらに、一号遺跡の一部に混石製形代類が発見されていることが知られて、応急に調査して遺物を収納しておく必要にせまられ、ここに手をつけたところ案良三彩壺が発見され、一号遺跡発掘の端緒がひらかれた。この間、日隠敏・潮見浩による二号巨岩北方の高所に三十二号岩蔭祭祀遺跡の発見があり、また二号巨岩下に松見守道・阿久井長則らの忌探機による二十三号遺跡の発見があった。

第三号調査は三十二号岩蔭祭祀遺跡・松本峯・弓場紀知・中倉民男があたり、一号露天祭祀遺跡に小田富士雄・宮田茂・真野和夫・岩崎二郎・武末純一・井上団平があたり、四号遺跡の下層に発見された縄文時代洞穴遺跡に前川威洋・黒野肇・沢皇臣があたった。

第二、三回調査を通じて写真撮影に松見守道・阿久井長則・米山芳夫があたり、測量に日隠敏があたり、鉄パイプの足場枠組には吉村政義があたった。

第三回までの調査を通して祭祀遺跡以前の遺跡の実態ははっきり、祭祀遺跡の始源から祭祀に至る各時期の内容をほぼ明らかにすることができた。

祭祀遺跡の構成

沖ノ島の祭祀遺跡が巨岩上から岩蔭へ、さらに露天へと移行していることはこれまでにも述べたとおりである（前回瞬報一八～二十頁）。またこれまで発見されている祭祀遺跡は沖津宮社殿を中心とする巨岩の集積したところであった。ところがあらたに発見されたこの二号遺跡はこの地区からはなれた高所にあって最北端を占めている巨岩より北方にあたり、さらに露天祭祀所にあって、急傾斜をなして下方深くのびる黄金谷に面した典型的な岩蔭祭祀遺跡であった。

さらに第二・三回の調査によって、遺跡の構成上あらたに注目されてきたのは二〇号遺跡であった。岩蔭といえるほどの奥を遮ける岡所もないが、やはり巨岩から完全に祭祀分離しえない状態がある。これは祭祀形態の推移からみるなら巨岩蔭から露天に移行する過渡的形態として認識できるであろう。かくして第二、三回の調査を通して祭祀遺跡の構成は次の四期に分けることができる。

Ⅰ　巨岩上における祭祀

Ⅱ　巨岩を中心とする一六・一七・一八・一九・二三号遺跡と F号巨岩上の二十一号遺跡がこれにあたる。なかでも二十一号遺跡では F号巨岩の頂上に方形祭壇を築いて、中央に依代に擬せられる岡を据えて、人為的な祭座と境界を構成した様子がうかがわれたのは新しい発見であった。巨岩上の祭祀は五世紀を下限としている。

Ⅱ　岩蔭における祭祀

沖ノ島の島祭祀遺跡としては最も多いタイプである。B・C・D・E・F・G・H・K号巨岩を利用した四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十五・二十二号遺跡である。このタイプの遺跡は六・七・八号遺跡に好例をみたのであるが、あらたに二号遺跡を加えることができた。七・八号のような岩蔭直下に安定した平坦面をとりうる遺跡は奉献品をそのまゝなゞおいているが、六・二号のような岩蔭直下の平坦面が少なく、傾斜しているところでは石組による祭祀の外郭を設けて、内側に砂利を敷いて岩蔭一杯に祭壇面をつくり、奉献品をならべておく方法がとられた。四号遺跡は二段の洞穴を構成しているが、広義のこのタイプに含めてさしつかえないであろう。下限は七世紀に至る及ぶであろうか。

Ⅲ　半岩蔭・半露天における祭祀

二〇号遺跡の調査によって注目されるにいたった祭祀のタイプである。ほとんど岩蔭といえる状態はみられず、わずかに巨岩の陰に雨を避ける岡所があるが大部分は露天である。そして一四号はこの遺跡の一部をなすことが明らかにされた。奉献品はその両所にわたっておかれている。しかしこの遺跡では奉献品の質量ともに貧弱であるが一応最限度の古代祭祀に必要な品物が奉献されている。奉献品が次第に固定化されてゆく神社祭祀に通ずる性格が指摘できるが、完全に巨岩を依代とする形態から脱却しえない姿をみることができよう。こゝで改めて注意されるのは前記瞬報にした五号遺跡である。この遺跡は岩蔭遺跡のタイプとして処理した方、厳密にはこのタイプに属しむるのが適切である。しかし、出土品の内容、岩蔭の占める割合などは、二〇号遺跡より古いものであるので、編年上は五号→二〇号の順となり、やがて露天祭祀へと移行したのであろう。三号遺跡もまた、このタイプに含めるのが妥当であろう。

（つづく）

二宮佐天茲主人

四島一二三伝

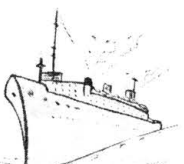
――原田種夫著――

それというのも、鉱夫たちが酒をのみ、ばくちを打つのはよいとしても、暗い坑内での乱れきった風紀のいやらしさに堪えられなかったのだ。炭鉱の坑外には遊廓婦がおり、坑内には女後山がいた。後山というは、切羽で石炭を掘る人を助け、掘った石炭を運搬する仕事をした。その女後山には年頃の娘が多く、かの女たちを「じょうもん」とは、上物（じょうもの）の訛化である。炭鉱に於ける「婦女子の入坑禁止」は昭和五年九月一日から実施されたが、四島青年がたゝは、女後山がたくさんいたのである。

女後子は、薄桃いろの胸割りシャツの上から荒い絣の着物をきんたんを紅い紐で縛る。その上を一丈二尺の晒木綿でしめる。頭髪は束ねて晒の手拭で巻きこみ、それからもう一本の豆絞りの手拭で頭髪の全部を覆う。それと汗ふきの手拭をもう一つ用意した。坑内に入ると、持ってきた「かるい着」（作業衣）と替える。作業衣はあるが、「まぶくこ」（坑内べこ）で腰を包む。かるい着て短かいので下腹部や臍があらわに出ることが多い。まぶくこは申し訳程度に下腹部を覆い、外股のことを二、三寸割って足の運ばんを楽なようにする。お尻の方もほんの少し包むだけだった。わらじもはかない裸足だけだった。わらたり、放棄したりするのが普通であるが、こうと決めたらそれを実行しなければならなかった。

足首まで黒しかないのをはいた。そして坑内の女はみんなこってり厚化粧をしていたが、これは坑内の炭塵が、やわらかい皮膚にしみこまないように毛細管を塗りつぶしたのだ。そこで、淡いカンテラの光の輪に浮かぶ女は抜けるほど色白くて美人にみえた。それに荒くれの裸男が魅惑されて風紀が乱れたわけであった。

健全な精神を身につけていた四島青年は、酒や、ばくちや、風紀紊乱を見て炭鉱生活に深い嫌悪を感じ炭鉱をやめてしまった。そして、鯵田鉱から飯塚、天道、桂川、筑内野、冷水峠を通って金島に戻った後に巡店のために参勤交代の道を通る時、四島氏は炭鉱から帰る途中でわらじが切れ、跣で歩いたが路上一めんに毛虫が這っていていやでしょうがなかった、と運転手に語ったそうである。金島部落に戻ってからしばらくは、部落の者は「炭鉱者」といって敬遠したということである。当時の人がいわゆる炭鉱の者をどう考えていたかということがわかる。



炭鉱から戻ってからも、四島青年は渡米したいということを主張していきりに両親を説得しにかかったがなかなか承知してもらえなかった。それでも、渡米するという青年時代の一挿話だ。粟飯を食べるのは珍らしいことではなく、近年まで田舎では普通のことであった。かって氏が、幼かった子息の司氏をつれて、小都の近くにある臭さんの姪の嫁ぎ先の家にいった時に、粟飯を焚くのをみて幼ない司氏が「あの明ほんが食べたい」といった。それで、出来たての粟めしを茶碗についでもらったが、司氏はその匂いを嗅いだだけで食べなかったという話がある。

氏の育った三井郡は文化的に見て後進地域であったにちがいない。明治二十九年といえば、その十二月に活動写真というものが日本にはじめて入った年だ。電灯にしても、東京では明治二十年一月に、はじめて営業用電灯が鹿鳴館にとりつけられた。その電灯にしても、明治二十年十一月一日、博多電灯株式会社（資本金五万円、東中洲）の手によって、はじめて福岡市内に点灯されているありさまである。おそらく金島部落では、菜種油の家に行燈の家とがあったことだろう。

ある時、四島青年は、自分より二つ年上の娘の家に夜更けにあそびにいったことがある。何しろ十六才、青春の血燃える頃の部落ではこういうことはよくあることで異とするに足りない。しばらくいてからいざ帰ろうとすると、家の裏窓と火の精神力が培われていたのだ。いま一つ、この頃の四島青年を震撼させる次のエピソードがある。

農民は米の飯を町の人のように食べたい、と考えた。米の飯さえ食べさせてくれたらいくらでも働こうと思ったのだ。そこで一策を案じ、近くの筑後川で引き網をして鯉や鮒を沢山獲り、その魚籠と網をもって、いつも兄の藤次郎氏が通る道の藪の中で寝ていた市次青年をみてびっくりした。近よってみると、青年は昏昏として眠っていた。近よって揺り起こそうとすると、

「この藪の中が好きになってしもった。この藪の中が好きになってしもった」

と、うわ言をいった。

おどろいた藤次郎氏がそのことを父の久五郎氏にいうと、これもおどろいた。

「これは困ったことになった。市次には狐が憑いたのにちがいない。白米と油揚げを食べさせんと狐が落ちんぞ」

といった。そこで市次青年を家につれもどし、白飯と油揚げを三七、二十一日食べさせたのであった。これは奇策を弄してまんまと成功した話である。こういう奇想天外なことをする人であったという話がある。

十二月に活動写真というものが日本にはじめて入った年だ。電灯にしても、東京では明治二十年一月に、はじめて営業用電灯が鹿鳴館にとりつけられた。その電灯にしても、明治二十年十一月一日、博多電灯株式会社（資本金五万円、東中洲）の手によって、はじめて福岡市内に点灯されているありさまである。おそらく金島部落では、菜種油の家と行燈の家とがあったことだろう。

ある時、四島青年は、自分より二つ年上の娘の家に夜更けにあそびにいったことがある。何しろ十六才、青春の血燃える頃の部落ではこういうことはよくあることで異とするに足りない。しばらくいてからいざ帰ろうとすると、家の裏窓と火の精神力が培われていたのだ。いま一つ、この頃の四島青年を震撼させる次のエピソードがある。

農民は米の飯を町の人のように食べたい、と考えた。米の飯さえ食べさせてくれたらいくらでも働こうと思ったのだ。そこで一策を案じ、近くの筑後川で引き網をして鯉や鮒を沢山獲り、その魚籠と網をもって、いつも兄の藤次郎氏が通る道の藪の中で寝ていた市次